

●六十年の歳月を隔ていま蘇る——二松学舎大学21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」の成果

本邦における支那学の発達

(倉石武四郎講義)

倉石武四郎講義ノート整理刊行会編

(代表 戸川 芳郎)

【はじめに・解説より】

本書「本邦における支那学の発達」は、倉石武四郎教授が昭和二十一（一九四六）年度の支那哲学支那文学科「特殊講義」として、東京帝国大学文学部において講述したその題目である。本書は、倉石教授がこの講義のために準備した自筆ノートを翻字して、整理をほどこし、版行におよんだものである。……本講述ノートの特質は、まずその学的立場にあり、「本邦における支那学の発達」と題することはそれを自覚的に標榜している。本書巻首に収載する倉石武四郎「日本漢文学史の諸問題」の中で、この講義に言及して「もちろん、その表題の示すごとく、日本漢文学史というのではなしに、これから支那学の路に分け入る人たちの道しるべとしたものである」と、自ら端的に述べる。「支那学」とは、明治以降の近代的學術研究の歩みの中で、とくに京都大学における中国研究の学的態度・方法を示す総称として知られるが、ここでは中国の學術・学問という意味で理解してよからう。「中国学」と換言してもさしつかえあるまい。この根底には、「外国文化研究としての「支那学」（中国学）」と日本研究としての「漢文学」とを峻別する意識が強く働いている。本ノートが漢文学を歴史として研究することすなわち日本漢文学史研究を重要な課題と認識しながら、ここに、「支那学」の発達という表題を掲げたことは「日本漢文学史」や「日本儒学史」とは異質の視点に立つ問題意識をどのように具体化して呈示していくかが焦点となる。今日、国際化の中、日本漢文学研究があらためて日本学としてその再構築を目指すとき、まずは「これから漢文学（日本漢学）の路に分け入る道しるべ」として、問い直してみたいと思う。

【内容目次】

はじめに

倉石武四郎「日本漢文学史の諸問題」

凡例

本邦における支那学の発達

倉石武四郎講義

一 大陸文化の受容

二 平安期の中国学藝の受容

三 博士家の学問と訓法の発達

四 遣唐使廃止後・鎌倉と日宋交流

五 宋学新注と五山文学、書物の印刷

六 惺窩新注学、羅山点と闇齋点

七 仁斎と徂徠

八 七経孟子攷文・護園学派、唐話学と長崎通事

九 江戸期学藝のひろがり、白話小説・戯曲

十 幕末明治の漢詩文と学藝

十一 漢学・東洋史学

十二 京都支那学

十三 諸帝大の支那学・東洋史学・支那語学

補注

解説

書名・人名索引

▼A四判並製本／230頁／定価2100円

07年3月刊

ISBN78-4-7629-1216-0 C3000